

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 5 月 31 日現在

機関番号：12608

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520274

研究課題名(和文) 20世紀初頭の「金持文化」の形成とスコット・フィッツジェラルド文学

研究課題名(英文) Formation of the Early 20th Century Rich Culture and Scott Fitzgerald Literature

## 研究代表者

上西 哲雄 (Uenishi, Tetsuo)

東京工業大学・外国語研究教育センター・教授

研究者番号：90193820

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：最も進んだ資本主義と自他ともに認める合衆国において、その重要な要素であるはずだがこれまで取り上げられることの少なかった金持の自己意識を、特に労働観とからめながら文化的に解明することを目指すものである。それを、合衆国の資本主義の最初の急騰かつ長期にわたる発展を見せた十九世紀後半から1920年代までに登場したF. Scott Fitzgeraldを中心とした小説家達による文学テキストを手がかりとして行った。ほかにはMark Twain, William Dean Howells, William Faulkner, Ernest Hemingwayなどを取り上げた。

研究成果の概要(英文)：This study is an essay to explore the self-consciousness of the rich class including their views of labor which is one of the essential elements constituting the culture of the United States generally recognized as the champion of capitalism. The project was pursued through analyzing those literary texts appearing from late 19th century to 1920s, during which United States capitalism saw prolonged and rapid growth, which include those of F. Scott Fitzgerald especially centered on, and Mark Twain, William Dean Howells, William Faulkner, and Ernest Hemingway.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：金持文化 資本主義 金持 労働 階級 アメリカ文学 F. Scott Fitzgerald

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 近年始まった「金持文化」の研究

合衆国における支配階級の問題に正面から取り組んだ研究は、1950年代に相次いで登場した Charles Wright Mills あるいは John Kenneth Galbraith の支配階級論があるものの、これらは階級分化の中で支配階級がどのように社会を支配するかという 19 世紀末の Thorstein Veblen にまで遡るリベラルな政治的立場からのアプローチの域を出ない。この「支配階級」を個人的な経済状態すなわち富裕であるという枠組で捉え直し、そうした状態で生きる個人の意識の総体を文化として考えようとするアプローチが Steve Fraser らの Ruling America (2005)、Larry Samuel の Rich (2009) などに見られ始めている。

### (2) 立ち遅れている文学研究

個人的な意識の総体を文化として捉えるならば、個人の意識を具体的に扱うことがその特性である文学作品にこそ過去の事例を求めるのが自然であるが、文学研究においてはいまだに「金持文化」なるものの存在を認めてテーマとする動きは殆ど無い。むしろ社会科学的アプローチの上記 Ruling America、Rich のいずれにも文学作品への言及があり、文学研究分野からの応答が待たれる状況であった。

### (3) 社会科学も注目する「金持文化」の文学としての F. Scott Fitzgerald

むしろ社会科学的アプローチの上記 Ruling America、Rich のいずれにも文学作品への言及があること、しかもいずれの場合も F. Scott Fitzgerald の作品その他における金持についての描写やコメントを、事例として扱っていることは注目すべきである。

Fitzgerald 研究においても社会科学が注目するような彼の金持への言及を主要なキーワードとされることがしばしばであるが、それはあくまで作家の人物像を構成する要素として扱うか、愛、欲望、夢といった他のテーマを論じる補助線として活用されるだけで、そのテキストを「金持文化」の具体的な表出として本格的に扱うものは皆無と言ってもよい。

## 2. 研究の目的

(1) 最も進んだ資本主義と自他ともに認める合衆国において、その重要な要素であるはずだがこれまで取り上げられることの少なかった金持の自己意識を文化的に解明しようとするものである。

(2) とりわけ、20 世紀初頭の 30 年間は、合衆国の資本主義の最初の急激かつ長期に亘る発展がある到達点に至る時代であり、その最終局面に当たる 1920 年代に活躍した F. Scott Fitzgerald の文学に焦点を当てて、時

代に翻弄される具体的な個人の意識を検討する。

(3) 最終的には、資本主義を文化的に解明する際には「本丸」とも言うべき「金持文化」という研究の視点を確立することを目指す。

## 3. 研究の方法

### (1) Fitzgerald 及び周辺作家など関連テキストの分析と整理

応募者はこの課題以前より Fitzgerald の主要作品の殆どを読了しているものの、「金持文化」の表象という立場から急ぎ再読すると共に、同時代の作家の作品、あるいはキリスト教関係のような他の文化的事象を扱う文書を含む、富裕層の自己意識の表出を窺うことができるテキストの発掘と解読を進める。「金持」文学という枠組みで見えるテキスト群の存在を明らかにする。

### (2) 「金持文化」を巡る先行研究の整理

「金持文化」という視点からの社会科学、人文科学による富裕層の研究はまだ緒についたばかりとはいうものの、幅広く支配階級、富裕層に言及した研究は少なくなく、そうしたものの渉猟と整理を通じて、「金持文化」研究という学的枠組みを明らかにする。

### (3) Fitzgerald を中心とする「金持文学」を巡る研究の確立

Fitzgerald を代表とする「金持文学」が「金持文化」を表現することを通じて、近代化の中で人々が憧れ/誇る富の偏在が人々の意識に何をもたらしたのかを、事例研究の面から解明することを通じて、「金持文学」「金持文化」とその研究という方法論を確立する。

## 4. 研究成果

### (1) テーマとしての「金持文化」を確立

研究の骨格を構築：なによりもまず Fitzgerald の主要作品を再読し本研究の趣旨から解明し直して、金持文化を巡る議論の出発点となる基本的な仮説を確立することを目指していたが、それは早い段階でおおむね達成された。初年度に集中的に行った作業の成果は、2 年度目に刊行された『アメリカ文学のアリーナ』への寄稿論文「ビジネス・ロマンスは可能か F・スコット・フィッツジェラルド文学の大衆性の意味」において結実しており、こうして得た知見を基礎とするものである。

金持文化の重要な要素を解明：また上記の Fitzgerald の長編 5 作の分析作業の過程で、本研究が対象とする 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけての新しい金持文化の形成に出版・ジャーナリズムが大きな役割を果たしたことを、前出の『アメリカ文学のアリーナ』への寄稿論文の中で明らかにした。また、当初より仮説として金持文化の背後には労働

倫理を巡る問題があることを前提に議論を進めることを試みており、やはり二年度目に刊行される『ヘミングウェイと老い』への寄稿論文においては、Hemingway と比較しつつも、同じく Fitzgerald 文学を参照しながら、「老いる」ということと労働倫理との関係を解明している。

## (2) 対象作家とテーマの拡大

### 概要

当初 Fitzgerald 文学の中で金持文化なるものを検討して生成した仮説が他の文学においても機能するものなのかどうかを確認し、また Fitzgerald の文学テキストでは解明しきれない位相への目配りを行うため、漸次他の作家をも対象としつつ検討することを行った。結論から言うと、さらにそれは他の作家固有のテーマにもからむ形で、金持文化が異なった位相のテーマにも浸透していることが明らかになった。

具体的には、他の作家ということ言えば、金持文化の完成期とも言うべき Fitzgerald と同時代の Ernest Hemingway、William Faulkner、Edith Wharton (後期)、むしろ金持文化の形成期とも言うべき 19 世紀後半を代表する作家 Mark Twain、William Dean Howells の文学について、Fitzgerald 文学を追求することで生成した方法論を適用することで読み直し、多くの知見を得た。

また、金持文化は当然、その形成・完成の時期に重要であった宗教や大衆文化とも深く関わり、文学テキストにおける金持文化の表出も、宗教や大衆文化の描き方の中に織り込まれるように見られることを明らかにした。具体的には次のようなものである。

Hemingway 文学への応用：Fitzgerald とは時代的にも個人的にも近かった Ernest Hemingway の文学において、金持観と表裏一体の労働倫理の問題が必ず様々なテーマの重要な要素となると考えた。上掲の『ヘミングウェイと老い』は、そうした観点から後期代表作 The Old Man and the Sea を分析したものであった。また、初期代表作の The Sun Also Rises における宗教表象から読み取れる信仰を巡る物語の構造に、労働についての価値の問題がからんでいることが解明された。(2013 年のヘミングウェイ協会全国大会のシンポジウムで発表し、発表原稿を改稿した形で寄稿した 2014 年の同協会の会誌掲載論文、あるいは同年刊行の『ヘミングウェイと老い』に寄稿した論文は、その成果である)

Faulkner 文学への応用：一見したところ、人種問題、南北問題が主要なテーマである Faulkner 文学の代表作 Absalom, Absalom! において描かれる南部の金持が、必ずしも南部的な金持とは言いがたいこと、さらにその語りの視点が 1910 年の北部であることに着

目し、東部工業資本主義を支えるピューリタンの労働倫理によって貫かれた金持文化が地方の金持文化を凌駕するようになっていくアメリカの状況を、南部の視点から描いていることを明らかにした。この議論は 2014 年に日本ウィリアム・フォークナー協会の会誌に推薦論文として掲載された。

Wharton 文学への応用：19 世紀後半を代表する Edith Wharton は、20 世紀に入って懐古的な立場から 19 世紀後半に変質を遂げる金持文化のその変化の様子を描いている(2012 年、アメリカ文学会北海道支部の要請でコーディネートした若手研究者のためのワーク・ショップでテキストとして取り上げた彼女の代表作 The Age of Innocence は 1920 年に刊行された)。こうした立場は、変質をほぼ終了した 1920 年代のアメリカにおける金持文化を代表する Fitzgerald の文学とは明らかに異なる。金持文化が 19 世紀に形成されて 20 世紀に入る辺りから変質していることが、両者を比較して鮮明に見えてくることが分かった。

Mark Twain 文学への応用：Mark Twain の文学についてはは最初期の Roughing It については戦争を巡って(2013 年、日本マーク・トゥエイン協会における「戦争とマーク・トゥエイン」での発題。発展させた形で翌 2014 年に同協会の会誌に論文が掲載。)後期の Puddn' head Willson については選挙を巡って(2014 年にアメリカ学会への投稿論文として掲載。)この間に発表してきたが、そうした議論においても金持文化の問題が重要な要素として存在することが明らかになった。戦争、選挙と言った、近代的な性格を帯びた社会的な事象が、必ず階級的な問題がからむこと、したがって文化的には労働観と表裏一体である金持観の物語への表出が、それぞれの議論の重要な要素として検討することとなった。

William Dean Howells 文学への応用：19 世紀後半を代表する小説家・文芸批評家の Howells の文学テキスト A Modern Instance、The Rise of Silas Lapham などに表出する経済的成功と労働倫理の関係を検討したが、そこには金持階級の一員になるには富を獲得するだけでなく、金持文化を獲得することが必須であること、それはアメリカ資本主義の倫理とされたピューリタンの労働倫理とは相容れないものがあり、成功の鍵として喧伝されていたピューリタンの労働倫理が、労働者のインセンティブとしてしか機能しないことが明らかにされていることを解明した。

Fitzgerald 文学へのフィード・バック：以上のように他の作家の文学に応用する過

程で、金持文化についての理解は、それぞれの作家固有のテーマとの関係を通したものと深まった。たとえば戦争や映画といったテーマでの検討の中で Fitzgerald 文学における金持文化への洞察がより複雑なものとして表出していることが明らかとなった。

(3) Fitzgerald 研究の手段としての金持文化研究から、金持文学という視点へ

以上のように、当初は Fitzgerald 文学にテキストを限定して金持文化研究の方法的基礎を確立した上で、対象とする作家を広げて、その方法を適応したところ、それぞれのテキストには金持観が何らかの形で表出しており、それぞれの作家が持つ固有のテーマが、実はいずれも何らかの形で金持観が表出していることが明らかとなった。

すなわち、当初の目標であった、金持の自己意識つまりは金持の金持観とその裏返しとしての労働観について 19 世紀から 20 世紀にかけてのアメリカ文学テキストへの表出の中で明らかにすることができた。

また、この時期の作家と作品を比較検討することで、金持文化そのものも 19 世紀から 20 世紀にかけて、特権階級的なものから、個々の欲望の総体といったより資本主義的なものへと変貌する様子が、テキスト群全体として示していることも明らかとなった。こうして、資本主義を文化的に解明する際には「本丸」とも言うべき「金持文化」という研究の視点の確立に大きく寄与することができたと総括するものである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

上西哲雄『『日はまた昇る』の信仰 Technically Catholic に込められた方向』『ヘミングウェイ研究』日本ヘミングウェイ協会, No. 15, pp. 45-55, Jun. 2014. (査読なし)

上西哲雄『金持小説としての『アブサロム、アブサロム!』 1910 年の風景をどう読むか』『フォークナー』日本ウィリアム・フォークナー協会, No. 16, pp. 108-19, Apr. 2014. (査読付き)

上西哲雄『『西部放浪記』に読むトウエインの南北戦争 F. スコット・フィッツジェラルドとの比較の中で』『マーク・トウエイン 研究と批評』, 日本マーク・トウエイン協会, No. 13, pp. 35-41, Apr. 2014. (査読なし)

上西哲雄『『まぬけのウィルソン』とその時代 「1853 年選挙」の風景』『アメリカ研究』, アメリカ学会, No. 48, pp. 21-38, Mar. 2014. (査読付き)

〔学会発表〕(計 8 件)

上西哲雄『A Modern Instance と The Rise of Silas Lapham』 (シンポジウム:「かくも長き無視の果てに William Dean Howells の真価を求めて」の発題として) 日本英文学会第 87 回全国大会 2015.5.24 立正大学 (東京都品川区)

上西哲雄『フィッツジェラルドと戦争』(シンポジウム:「第一次世界大戦とアメリカ文学 戦争、作品、作家の力学の発題として」) 日本アメリカ文学会関西支部第 58 回大会 2014.12.6 関西学院大学 (兵庫県西宮市)

上西哲雄『アメリカ映画を物語る』(シンポジウム「アメリカ文学と映画」の発題として) 日本アメリカ文学会第 53 回全国大会 2014.10.5. 北海学園大学 (北海道札幌市)

上西哲雄『19 世紀後半のキリスト教とマーク・トウエイン 『アーサー王宮廷のコネチカット・ヤンキー』を中心に』(シンポジウム「宗教とアメリカ文学」の発題として) 日本アメリカ文学会東京支部会 2014.06.28 慶応義塾大学 (東京都港区)

上西哲雄『『日はまた昇る』の信仰 Technically Catholic に込められた方向』(2013.12.22 日本ヘミングウェイ協会第 24 回全国大会 ( ) シンポジウム「ヘミングウェイと宗教」の発題として) 内田洋行株式会社 ユビキタス協創広場 (東京都中央区)

上西哲雄『アメリカ文学と仕事』(講演) 日本アメリカ文学会九州支部 12 月例会 2013.12.14 西南学園大学 (福岡県福岡市)

上西哲雄『語らぬ中で語ること F. スコット・フィッツジェラルドとの比較の中で』(シンポジウム「トウエインと戦争」の発題として) 日本マーク・トウエイン協会第 17 回大会 2013.10.14 慶応義塾大学 (東京都港区)

上西哲雄『テキストを読む』(2012.8.11 日本アメリカ文学会北海道支部第 10 回「若手研究者のためのワーク・ショップ」The Age of Innocence を読む) の発題として 北海道大学 (北海道札幌市)

〔図書〕(計 2 件)

上西哲雄『ヘミングウェイと老い』, 松籟社, Nov. 2013. (共著) 分担章:「フィッツジェラルドから見たヘミングウェイ文学の「老い」 『日はまた昇る』から『老人と海』へ」 pp. 115-38.

上西哲雄『アメリカ文学のアリーナ ロマンズ・大衆・文学史』, 松柏社, Apr. 2013. (共著) 分担章:「ビジネス・ロマンスは可能か F. スコット・フィッツジェラルド文学の大衆性の意味」 pp. 225-57.

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

上西 哲雄 (UENISHI, Tetsuo)

東京工業大学外国語研究教育センター・教

授

研究者番号：90193820